



佐野  
いろは  
カルタ



## い 石黒新九郎眠れる墓に椿咲く

石黒新九郎の墓は下町内一丁田（山田義広氏）の下にある屋敷跡であり、墓の目印に植えられた椿の大きさが今も繁っています。新九郎は大変な力もちで、二斗用臼に米を入れその臼を持ち上げて下の方を掃除させたそうです。また堆肥も一グロ（一山）を一度に背負ったそうです。あの年「ワセ」（稲を早刈りして作った焼き米）を一度に三升食べ、その直後水を沢山飲んだため「ワセ」が腹の中で膨らみ、パンパンの腹に荒縄を巻きつけるなどして大変苦しんで亡くなったと言っています。

年代は明確ではありませんが、椿の大きさからして二百年くらい前の事ではなからうかと言われています。

## ろ 労作の「いろはカルタ」で和やかに

浜田市（高齢者クラブ）では平成十六年より各地区に、サロン活動の開設促進が行われ、佐野地区も寿会館の開設を機に、平成十八年より活動を始めました。講師を迎え数々の活動を行っています。その中の一つに「佐野いろはカルタ」作りがあります。

会員が色々見聞きした事や調査した事などの話し合いを重ね苦勞しながらも、和やかな活動しております。

## は 花嫁と共に来なさる青木の地藏様

昭和三十年頃まで結婚披露宴は、自宅に花嫁を迎えて時間の制限なく名開き、お色直し、土産開き、納めと色々名目をつけて盛大な酒宴が行われていた。其の祝宴に地域の若い衆が花嫁さんが幸せで、居心地良く末永く居据われると言う意味でお地藏様をお連れして祝い込みをするという風習があった。

重い地藏様ほど良いと言うことで、青木の地藏様も度々出番があったが、今では設備の整った式場で行われ、お地藏様をお連れすることはなくなった。

現在のお堂は佐々木重美様の土地で推定三五〇年の杉の古木の脇に安置されている。木造であったため、建替や修理が行われて来たが昭和六十一年佐々木様ほか世話人の方に依頼されモルタル製入母屋造りにして祀り現在に至っている。

## に 日月を経て尚なつかしい佐野の郷

### ほ 保育園親子で楽しく芋作り

つくし保育園では、平成十三年から隣接する休耕田を借用してコスモスの花、レンゲの花、菜の花などを植えて花の観賞をしていましたが、幼児の食育が重視されるようになりその一環として、みのりと、つくしの園児が夏野菜やサツマイモの栽培をはじめました。

芋掘りには保護者も参加し、特にみのり保育園は親子遠足を兼ねて親子芋掘りとなり、秋の収穫を楽しんでいます。

## へへへのもへの宇津井の案山子

宇津井町千谷地区で活性化活動として平成十七年案山子祭りを始められました。

当初、宇野町へ通じる県道の道端の田にハスを植えきれいな花が咲くようになつたので、その側に案山子を約三十体立てたところ通る自動車が車を止めて花や案山子を見るようになりました。そこで次の年から宇津井地区の人々や佐野小学校の児童も参加して百体近い案山子を作つてハス田の側や棚田の畔に立てて案山子祭りが盛大に開催されるようになりました。

他地域からの見物客も年々増えて、案山子も地域の活性化に一役かっています。

## と 時過ぎて「たたら」の話絶え

山の尾根が二カ所切れて山は美濃口に沈んでおります。その山の切れ目を「たたら」の丘」と言い山の横の谷を奥の益といっています。

そこに清水が流れており、その水に峰の土を掛け流して砂鉄を採取したと伝えられています。そして水を落としたと思われる場所が今も見取れます。「槓ヶ増利」(マツカソリ)に精錬鍛冶炉があつたようです。その左下に鉄のカスと言つてビードロ状の黒い石が耕土下にあります。又「掛け」という地番もあり土を掘っては水に掛け流した事を字名として、のちに付けたとも考えられます。

佐野にも、たたらを精錬所と実話の証拠の地が残っています。

(場所は上町内千代延公敏様宅の上の方)

## ち 地名を残し今はいずこに徳雲寺とくうんじ

徳雲寺は寛永年間に建てられたようである。

その場所は明確ではないが、町々内玉本重信氏の近辺にあったようである。玉本氏の下の子が徳雲寺川と言われていた。

杉原憲司氏の近くに「鐘突き」と云う地名が残っており、お寺の名残が感じられる。

又、「観音御詠歌和讃」に、徳雲寺に関する文言として

「ゆくたびもまいる心は徳雲寺、導きたまえ弥陀の浄土へ」と詠われている。

徳雲寺は今では詳細が分からない寺となっている。

## り 立派だよ佐野小児童の蕎麦づくり

平成二年、佐野地区が「ふるさと農業活性化事業」の指定を浜田市から受け、その中で水稲の転作として蕎麦の栽培に取り組みました。

それも次第に衰退し現在は、高齢者クラブと小学生が共同で栽培する蕎麦作りとして今日も続いています。

自分達で生産した蕎麦粉を使っての蕎麦うち食事は楽しみのひとつです。

## ぬ 主絶えて観音めぐりも遠ざかり

佐野には三十三カ所に観音様が祀られている。

願主は浮多四郎氏である。浮氏の邸宅は下町内（現武田氏の倉庫）にあつて、立派な茅葺の平屋の本宅と二階建ての長屋があつた。昭和三十年まで息子の源市氏が住んでおられた。

又その息子の敏行氏は浜田市殿町で、謄写技術院を開業しておられ昭和二十八年に観音御詠歌和賛集を作成して、観音様を祀っておられる家に配布しておられる。

観音めぐりは毎年九月一日に行われ多くの人が御詠歌を唱え佐野や田原の三十三カ所の観音様にお参りしたものである。

この行事も平成十四年以降とだえている。

## る ルンルン気分毎月寿サロン

私たち寿会員は、健康、友愛、奉仕をモットーとして楽しく活動しています。その中でサロン活動が始まりました。

平素思っている事を何でも気軽に語り合いながら、地域の活性化と健康づくりに役立てようとしています。

多くの先人達のご苦労とご恩を私達は忘れません。

そうした生い立ちに深く思いを致しながら、地域の名所旧跡等にも興味を覚え「いろはカルタ」でまとめてみました。

みんなの心が結び合うルンルン気分の寿サロンが面白い。

お 衰える体をいとおい一歩ずつ

## わ 我が街に出来たよ立派な信号機

佐野地区でも自動車の交通量が増え、道路の横断が危険になり自治会として信号機の設置を要望していた。

平成十八年十月十一日に、浜田警察署長をはじめ保育園児、小学生、地区民が参列して信号機の点灯式が行われた。

式典の後、警察官により横断の仕方を指導していただきその後安全に歩行が出来るようになると共に交差点が明るくなった。

## か 神楽舞地域を守る佐野社中

佐野神楽舞は古くから舞われているようであるが起因は不明である。

明治五年に佐野社中として登録しているとのことで六調子の神楽が舞われていた。大正初期に細谷社中から八調子の神楽が伝授され、それが現在も舞われ続けられている。

戦争で若者が戦場に出征し戦後は次男、三男は都会へ出るなどして神楽の継承は難しくなっていた。ところが昭和四十四年第十八回全国青年大会において佐野青年団が佐野の神楽「大蛇」を発表して一躍有名になり、若者が神楽の推進に力を入れはじめ、神楽会館を造ったり新しい舞を創作したりして盛り上がってきた。地元の祭りはもとより他の地域からも招かれて神楽を上演する様になり佐野の活性化に一役かっている。

## た 丹後坂昔を偲ぶ石畳

浜田から広島へ通じる芸州街道臼城谷から、佐野町を通って小松木に向かう急勾配の坂道のふもとに今、道しるべが立てられている。唯一の幹線で古い時代の工事だと思われる。

雨水で路面が崩れないよう、急勾配の坂に石を敷き詰め流失を防いだ当時の人の知恵であろう。これが丹後坂の石畳である。

佐野町が昭和三十三年に今福村から浜田市に合併するまでは今福への近道として通る人もあって毎年、道うちもされて来たが今は山仕事に行く人も少なく六十三年の大水害で崩壊し草木も繁り通りぬける事は出来なくなっている。

機械も道具もない時代人力で石を運び、敷き詰めた昔の人の苦勞が偲ばれ今でもハッキリと石畳はみられる。

## れ 靈光寺仏は今は立久恵に

杉山靈光寺境内は上町内中田ミサコ宅（門前）の裏山にあり百八十坪の土地で現在わかつているのは次のとおりです。曹洞派禪宗にて鹿足郡津和野町、永明寺の末寺で本尊釈迦牟尼如来、開山直庵大和尚と号し開基壇那創立年月不詳。先年は寄付の寺領の除地高として十石八斗前あり、旧幕府より亀井家へ引き渡しの後は五石四斗と年々お蔵米が減少、明示七年に浜田県より取り上げになりました。

以上のような訳で佐野を立たれ、大田市多根村佐比目に行かれ大正八年立久恵に移られた。当山は二百米に及ぶ天然佛像岩石の並ぶ奇岩が屹立している大佛像群に立久恵山靈光寺としてあります。

しかし今は住職はなく前職の赤木玄光さんが梵鐘を新しく建立された事や、総丸木造りの本堂のある事が判明しました。



## そ 測量で境界正した地籍調査

わが国の現在地籍の多くは、明治政府が行った地租改正に伴う土地調査の成果をそのまま受け継いでいるもので、当時の幼稚な測量技術と一筆の測量図を接合して字全域の地図が作成されているため、土地の広さ、形状等が殆ど実態に合わず、土地の見取り図としての役割しか果たしていませんでした。

そのため浜田市では佐野地区を国土調査法に基づく地籍調査を平成十一年度より実施（佐野町全域を三調査区に分割調査）平成十七年度に調査が終了し、その成果が国土調査法に適合していると認証され登記されています。

よ 喜びと幸せ感じる佐野にしよう

つ 通勤で四季を感じる佐野のよさ

ね 年齢を重ねて悟る人の道

な 何もかも捨てずに知恵だし再利用

き 気を配りみんなで守ろう佐野の子ら

## ら ラジオ導入昭和十年頃と言う

佐野の電灯とラジオ

電灯の普及 大正十五年一月一日点灯

電気の仕事にあたり地区住民は電柱運びなどの作業に出動のち松の根、カンテラ、ランプの生活に別れをつげた。

ラジオは昭和十年頃よりポツポツ普及しはじめる。

佐野電気建設記念碑が小学校体育館の裏にあります。

## む 村里にペタンクの声さわやかに

## う 馬淵のカツパも今は住家なし

その昔町々内の土橋を渡りつめた右手に造り酒屋があり、その酒屋に飼われていた馬の疲れを癒すため、馬淵につれていったところカツパが出てきて馬を深みに引き込みはじめた。

馬は驚いてとびあがり自分の馬小屋へかけこんだ。

ところが馬を取ろうとしたカツパも馬小屋へ入り込んできた、そして馬小屋の餌箱をあさっているところを、主人にみつかつてしまいカツパは「申し訳ないことをしました。許してください。これからは決して悪い事はしません。」とあやまった。

その馬淵も永年かかって河川の改良工事をされ、今では淵の形跡もない。

## る 井の中のかわずになるな視野広め

### の 農業も世界の波にさらされる

小麦や大豆、更に乳製品などの食料品の輸入に加え、価格の安い野菜までが外国から入るようになり、国内生産者に大きな打撃を与えてきました。

又、平成二十年には世界貿易機構から関税引き下げによって農産品の市場開放が迫られるなど、世界経済の中で日本農業の危機が感じられま

す。  
更に輸入食品から残留農薬が検出されるなど食の安全が脅かされる事件も多発しました。

### を 尾を結び搾乳に励んだ酪農家

昭和三十三年、十戸の農家で十四頭の乳牛を長野県より導入されその後年々増頭、三十六年に小規模草地造成、所得増に努めた。昭和四十二年創立十周年記念を行い当時三十戸で七十頭日産八百キロを生産し年間壱千万を売り上げ、仔牛を含め百頭が飼育されていた。生産性を高め管理技術の近代化、大規模草地造成も行い飼料基盤拡充、自給度の向上と多頭化に取り組み生産が伸びる中、乳成分の価格買いが始まり飼料も乾牧草を主体とする飼育が要求されるようになった。今日までの高額投資に加え、再投資はむつかしくついに廃業する事になった。

平成七年佐野集落より三十七年間飼育、生産された酪農の牛の声が消え去った。

## く 苦を重ね水路を引いた五郎右衛門

八代將軍吉宗の時代、新田開發が進められました。

その頃佐野の住人、河野五郎右衛門が私財を投じ下長屋の尻高丸と下  
来原の金田から佐野に至る、約四キロの山肌に水路を切り開きました。  
提灯の明かりをもとに勾配を決めたようです。これは今から約二百八十  
年余り前の事です。現在はコンクリート溝に改修された所もありますが、  
昔のままの溝も使っています。毎年四月には土地所有者三十名余りで、  
溝掃除を行い上町内（千代延公敏宅付近）から町々内（山田令二宅付近）  
までの広い農地でこの水を利用して米づくりが行われています。  
尚、五郎右衛門の墓と記念碑が石本の墓地に残っています。

## や 役果たしこの地に眠る乳母の墓

今から約三百年余り前の事、津和野藩主龜井家のご子息新十郎様のご  
養育に上がっていた乳母が、宿下がりに成りぬのちに田原村の庄屋（屋号  
土井）に乳母として入家した。元禄五年で名は於美弥、当時三十五歳で  
あった。ある日の夜この家に盗賊が忍びこむ惨事がおこった。一家を皆  
殺しにして金品や鳶の置物を持ち去った。その時乳母は一番下の子息を  
つれて隣の家に行っていた為にこの難から逃れた。そのうち乳母は子息  
を立派に養育したと伝えられているが、その後の詳細は不明である。

乳母は六十歳でこの世を去った。遺言によりこの地に葬られる事にな  
り、七人塚より少し上に墓が建てられたが、不思議な事に墓の周りは今  
でも草木が生えてこないと言つ。

ま 真つ直ぐな心をもって佐野そだて

## け 経済道今は昔の中見山

中見山は約四キロに及ぶ山道で田原より上府町に通じており現在は市道である。

交通状態が良くなるまでは、この山道がこのあたりの主要な経済道であり生活から産業のすべてを支えた往来道である。

荷運びも背に負った人達が行き交い唐鐘方面から行商の人達が夜明け前から大勢行き来して賑わった。

そして佐野に中宿を置き今福方面にも行商に行っていた。

山間ではあるがこの様子を知る人達には懐かしい思い出の道でありたい役を果たして来た坂道であった。

## ふ 夫婦共仲良くせよと子安観音

子安観音様は、産婆の小畑ツナさんが安産の守り観音様として信仰されていた。その後を継がれた産婆の前田キヨさんもこの観音様を信仰しお堂を守ってこられた。子供が授かるように、安産で子供が迎えられるようにと夫婦仲良くお祈りしたものである。

ところが昭和六十三年の水害で参道がぐずれてお参りがむつかしくなったので平成二年に美田町内としてお堂を勝田二夫氏宅の横に新築して観音様を安置し、毎年三月に法要を営んでおられる。

## こ 広浜線いまはひっそり三里塚

一六一九年以降、参勤交代時に距離の目印として浜田大橋南詰を起点に一里（四キロ）毎に標識が建てられた。

この標識を「塚」と称し広浜線の佐野地内臼城谷（うすぎたに）場所は前田憲二宅の奥で、三里塚、即ち十二キロの標識が残っていた。従来より三里毎に郵便局が置かれていたが、佐野には局長の該当者がなく、やむを得ず今福に郵便局が設置された経緯がある。

昭和五十七年に市道美田谷線の開通により、臼城谷方面への通行は減少し塚の建っていた所も山草でおおわれている。

## え 縁ありて佐野の未来の土となり

## て 定年後豊かな自然と農のあり

## あ 赤道あかみちの名残は今も柿原に

町々内の川本屋（佐古武雄宅）の前を通って美田町内の橋詰（上岡金三郎宅）方面へ行く赤道があり、その川を渡る所に大とび橋と呼ぶ橋があった。この橋は二枚の板を並べただけで中桁のない簡単なもので、渡るのに大変恐ろしいような橋であった。

町々内より川を渡り美田町内に入ると深い竹藪の中に地籍調査用の大きいコンクリート製境界杭が何本も立ち、赤道の名残を今に残している。

## さ 佐野上に魚きりと言う瀧のあり

下府川上流に自然にできた瀧と淵がある。

昭和十八年の大水害までは豊かな水量と澄み切った清流であり自然に出来た瀧も淵もあり、夏には水泳も出来るほど永い淀みもあつた。そしてどこをのぞいてみても鮎、ウグイ、鰻、鮎、もくず蟹等何種類もの川魚が見られたが、ここに瀧がありこの瀧から上に魚が登れないという事で「魚きり」と名前がついたと言われている。今では上流地域が開発され道路も縦、横、に整備舗装され工場が出来、色々な企業も進出して来て水は汚染され水量も半分以下になり、又度々の災害復旧工事により水の少ない川になった反面、川魚は八エ一匹みる事が出来ない。平成十二年より川下の宇野町では「下府川を楽しむ会」と言う運動がおこり、地域全体で取り組んだ結果、水質も戻りサケの遡上もみられた。

## ゆ 夢にしか語る事ない白城谷

何時の昔か不明ですが、白城谷から向うの伽藍屋敷（がらんやしき）を弓で射て一人残らず攻めいったそうので、その時男の子を抱きしめて乳母が逃げて行って助けたと言う話です。町々内の岡正二氏宅の右奥のわずかな平地の森を「乳母の森」と言つて今に伝えられています。弓で攻めたにしては相当な距離で川を中に矢の届きそうな話ではありません。伽藍屋敷の地番は今も残つており今福に越すカーブ沖にあたります。伽藍屋敷の隣に馬場があつて弓の射場が上、下にあり、裏の森には山城跡が残り堀切と平地がありました。

## め 眼鏡橋おもかけ残す広浜鉄道

浜田と広島を結ぶ鉄道の開通は明治の頃より要望されてきましたが、昭和八年ようやくその工事の着工が認められ昭和九年下府駅から今福に至る今福線工事が始められました。

佐野地区の工事は昭和十二年に、起工式があり戦争で工事が中止された昭和十五年には路盤は殆ど出来上がっていました。

現在その路盤の大部分を道路として使用しており鉄道は幻のものとなりました。

橋は鉄橋以外は安全性の高いアーチ橋工法が取り入れられて眼鏡橋として佐野や宇津井地区に多く残っています。

このアーチ橋群は、歴史的土木構造物の中から選ぶ「選奨土木遺産」として平成二十年に、土木学会から認定されました。島根県では三番目の認定です。

## み 未曾有の水禍に消えた巻水道

県道八重可部線佐野から今福へ向かう徳雲寺川を渡る橋で石工職人が切石で橋台から天場まで組み立てた珍しい橋で巻水道といった。広島を結ぶ主要道で明治時代の建立で難工事であったようだ。昭和十八年の大水害で林地崩壊により巻水道が堰になり一気に流失した。下流の田畑道路は埋没したり流失したり民家も大被害を受けた。幸いに下府川を渡る橋は唯一残り他の橋は全部流失した。当時は戦時中で人手もなく復旧工事も出来ず永い間苦勞させられた。この巻水道は主要幹線であり広島の大工兵隊が来て仮復旧した。今では改良工事を重ね永久橋が出来て当時の面影は見る事は出来ない。(現在の上佐野橋)



## し 庄屋土居無念に眠る七人塚

田原村の庄屋（土井家）の三代目正迪が藩や村のために尽くした功績により、金の鳶の置物を拝領していた。処が四代目正興が留守中に盗賊が忍び込み屋敷内に居た一家を皆殺しにして、金を奪い金の鳶の置物を持ち去った。帰宅した正興は拝領の品を失えば打ち首にあうだろうと考えて自殺したと伝えられている。

盗賊に殺された一家を屋敷の近くに葬り七人塚を建てその塚の隣に一本の黒松を記念樹として植えた。

三百年余にも及ぶ大木となっていたが、昭和五十四年松喰い虫の被害にあい伐採されてしまった。その後植えられた牡丹桜が毎年ピンクの花をつけ七人の霊を弔っている。

## 系 園庭で無病息災どんど焼き

平成六年、保育園、小学校、中学校（佐野地区）のPTAの役員の方々が「子育て懇談会」を結成して子供の健全育成に取り組まれた。

その活動の一つとして平成七年一月保育園の園庭でどんど焼きがはじめて行われた。

燃え上がる炎に感動し、よく焼けた餅を食べて無病息災を祈った。

現在ほとんど焼き実行委員の方々によって実施されている。

## ひ 日が昇り天神ヶ森に手を合わせ

いつの頃かは不明であるが、八幡宮の下にある宮野屋の庭にある椿の木に天神様のご神体（御幣）が来て止まられたと言ったことである。これを旧小学校跡地に隣接する山に祠を造ってお祀りした。この山を天神ヶ森と言っている。

学問の神様に頭が良くなるように祈ったものである。現在ご神体は八幡宮に合併されている。

## も 森原の美田に移った新校舎

差の小学校は明治六年に開校し、昭和四十九年に創立百周年記念碑が建立されました。美田町内坂本定夫氏宅の上にあった校舎は大正元年建築、昭和五十八年にお別れ会の後七十二年間お世話になった校舎を感謝の内に解体、新校舎は地権者の協力や関係者の努力によって、森原の立派な田圃を埋め立てて昭和五十八年竣工されました。この森原には昔祠がありましたがある年大雨で、祠ごと流れて宇野町の大宮宅の沖に流れ着き佐野から流れて来た事を知り、神様を迎えに来るよう沙汰がありましたが、迎えに行く時の話「勝手に流れて行った神など迎えに行かなくともよい」と医者と散髪屋が反対されたそうで佐野の地では同業は繁盛しなくなつたと言うジンクスが伝えられています。

## せ 咳止めの地蔵は今も上野原

誰がいつごろ祀ったのか不明であるが、上野原（旧小学校の上）の上がり口に安置されていた木造の地蔵様は咳止めの地蔵様として、喘息の人や咳の出る人がハツタイ粉を作ってお参りしていた。

上岡武（故人）さんのお母さんが年に一度家に仏像を連れて帰られ接待供養されていた。

木造でいたみがひどくなったので昭和五十八年佐々木政子さんが、石仏に作り替え今も祀られている。

## す 水道がやっと来ました十五年

安定した水源のない佐野地区は上水道の導入は町民の悲願でした。これが解決され全戸に水道が使用出来るようになったのが平成十五年で町民あげて喜び合いました。

「迎水」の碑の除幕式は平成十五年六月八日に行われその記念碑は小学校体育館の裏にあります。

## ん トンネルが佐野の周りを囲ってる

国道一八六号の大峠トンネルをぐぐり左折すると佐野の町が迎えてくれる。これのみならず佐野の町には隧道があちこちにあります。宇津井方面には現在両方の入り口が金網でふさがれたたトンネルがあります。また上町内には今福へ通じる一六三三米の直線のトンネルがあります。

他の地区には見られないトンネル風情を味わう事ができます。

## 編集後記

佐野老人クラブで立ち上げた「寿サロン」も途中本部が高齢者クラブに改名したのをはじめ紆余曲折を経乍ら、漸く落ち着いた二十年四月「サロン」でカルタを作ろうと言う提案に全員賛成。素人の集まり故に文書作りは皆で各々担当、絵は原田正明氏に依頼して幕が上がりました。各自が練り上げて提出した作品を確認し添削する段階で、説明文の必要性、伴う絵の表現内容等種々問題が出、説明文を作るため浜田市教育委員会、有識者や地元の多くの方々に問い歩き、ついには立久恵まで電話をかける等、一致団結で頑張った証の作品がどうにか完成しました。

この間、参加者の目がいきいきとし、女性もお茶当番を兼ねながら談笑したり頭を抱えたりで、この雰囲気よ永遠にと願います。

今後の「サロン」活動の一つとして引き続きカルタに詠んだ場所を探訪したり、カルタ取りの遊び方を考え出していきたいと計画しております。続く世代の佐野の皆様が故郷の証としてお伝えし、一方、他地区の皆様のご起爆剤になれば一同幸せに存じます。

肥塚由美子

平成二十一年

## 製作 佐野寿サロン

講師 肥塚由美子  
会員 石本 恒夫 永井 玲子

原田 正明 上岡 雪子

拝上 宗義 山本登茂子

大谷 義喜 深ヶ迫幸子

大谷 忠義 河野 綾子

齋ヶ原義広 東 絹子

(いろは順) 森脇 朝子